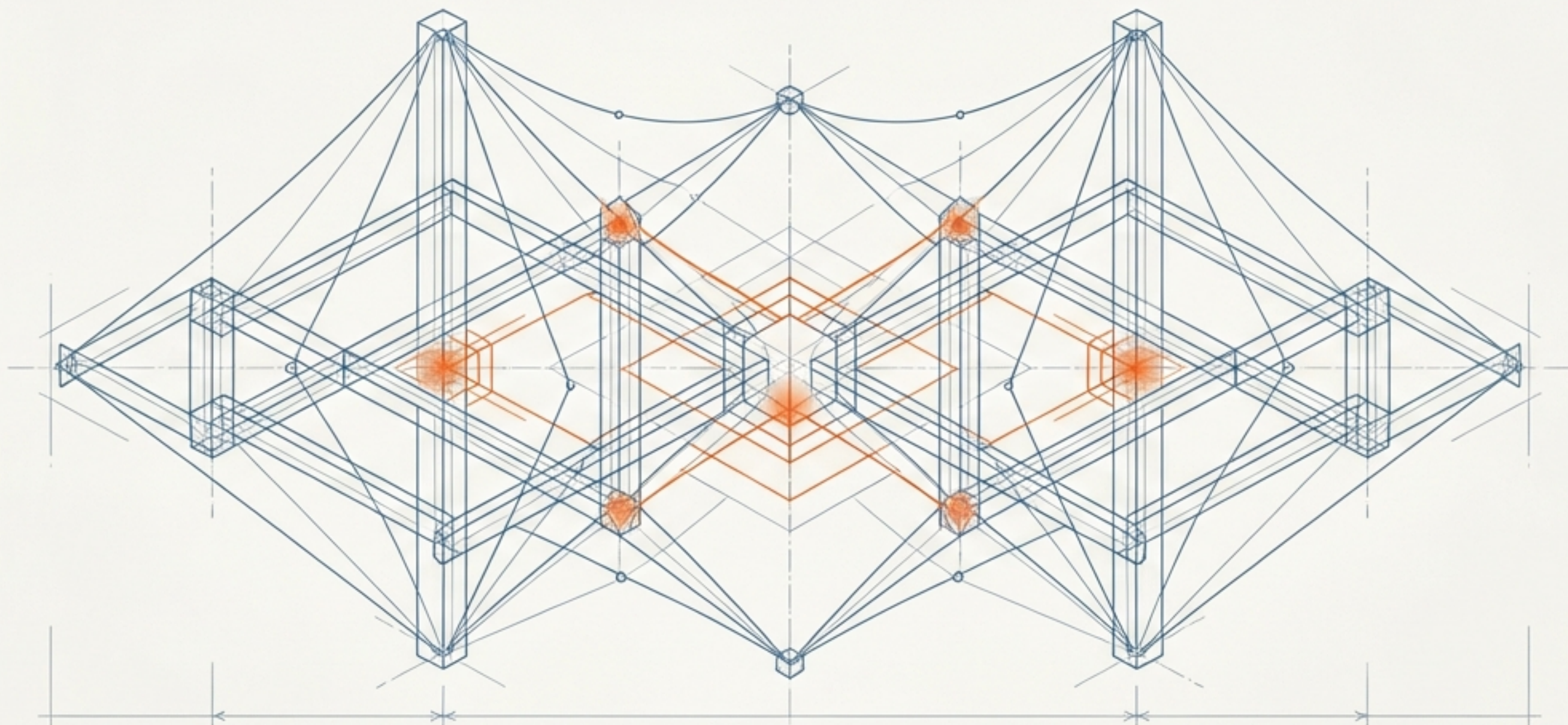


反司祭階級プロトコル

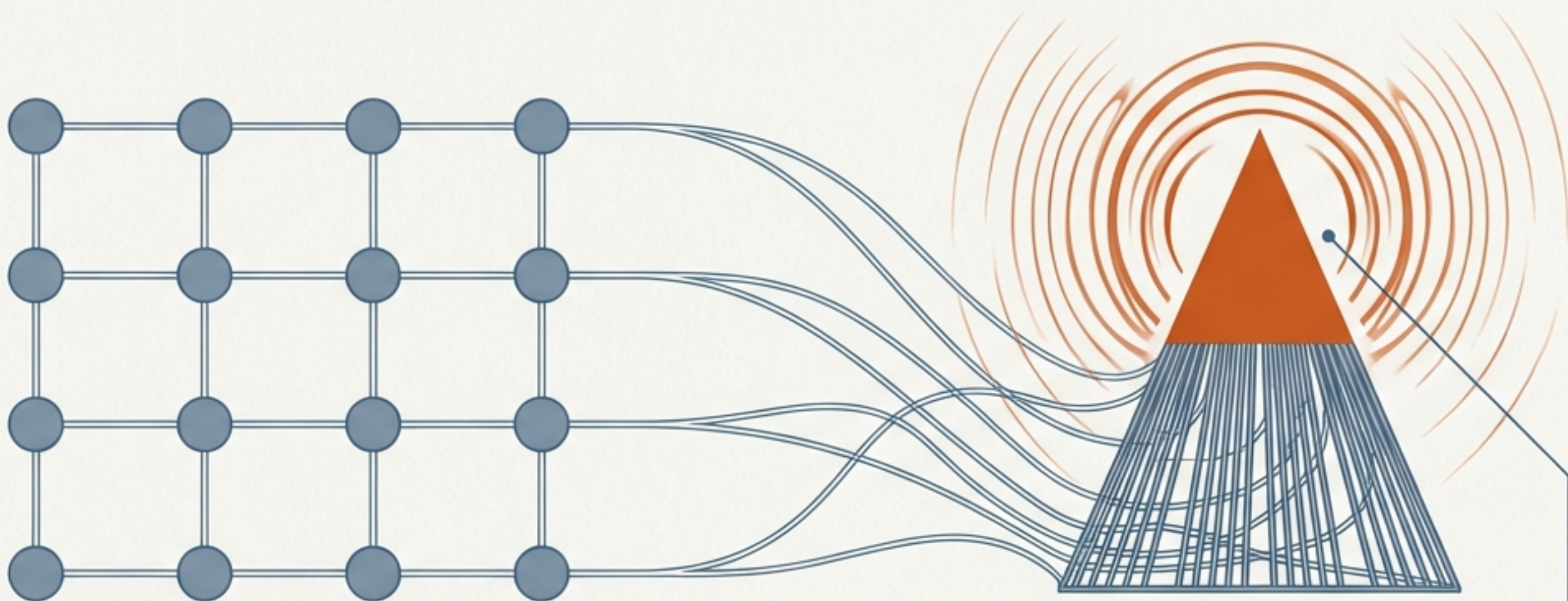
自律分散OSが理論の公共性を保つための
「構造的ブレーキ機構」



中川マスターの灯火構想と構造論：次世代社会のアーキテクチャ解剖

優れた理論が必ず陥る「権威集中」の罠

理論の普及や価値の拡張が進むほど、内部偏差が生じる。

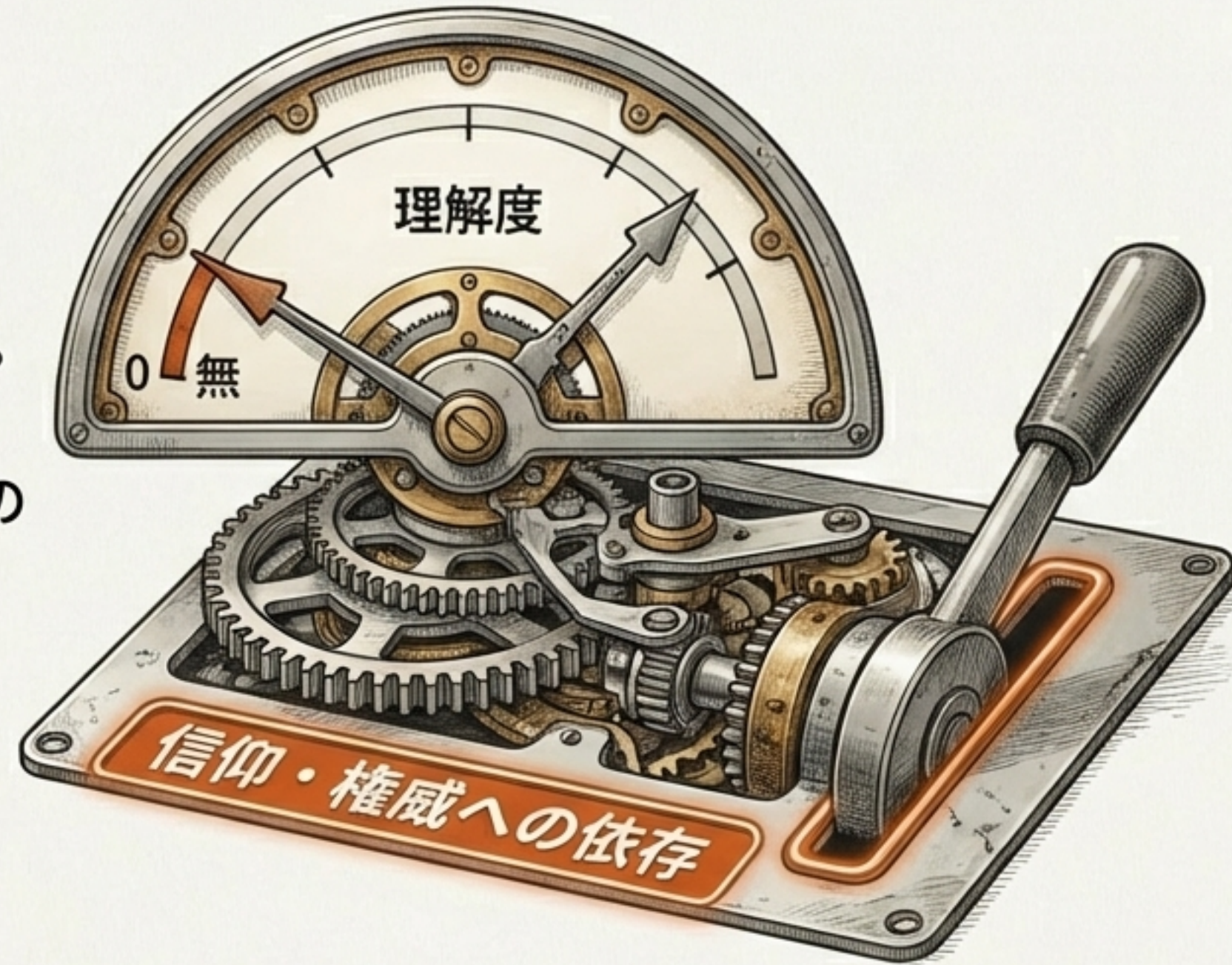


- 解釈の独占（一箇所への収束）
- 特定の語り手への依存
- 理論の「人格の延長」としての誤認

この偏差への収束を、本構造論では「司祭階級化（カルト化）」と呼ぶ。

権威化は「悪意」ではなく「認知のバグ」である

人は理解不能になると、対話ではなく権威（信仰）にすがる。これは道徳の敗北ではなく、社会が判断を持続させるための物理的な代替機構である。



「属人的な悪意を責めても、システムは治らない。」

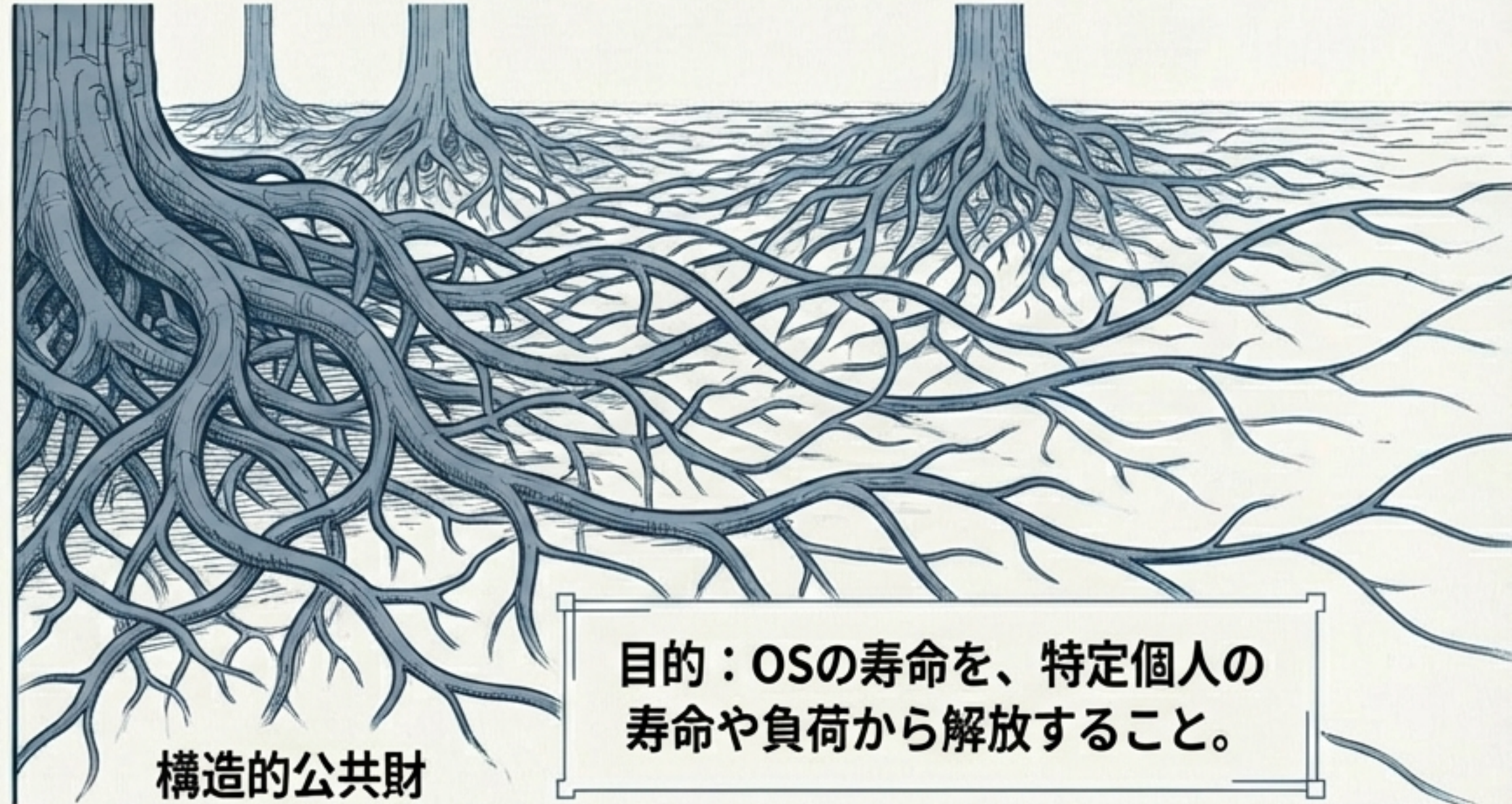
司祭階級化が奪う「構造的公共性」

構造OSの本質は「誰のものでもない」構造的公共性にある。

少数の中心人物に解釈と運用が依存した瞬間、OSの自律性は死に、場は硬直化する。



特定個人の所有物

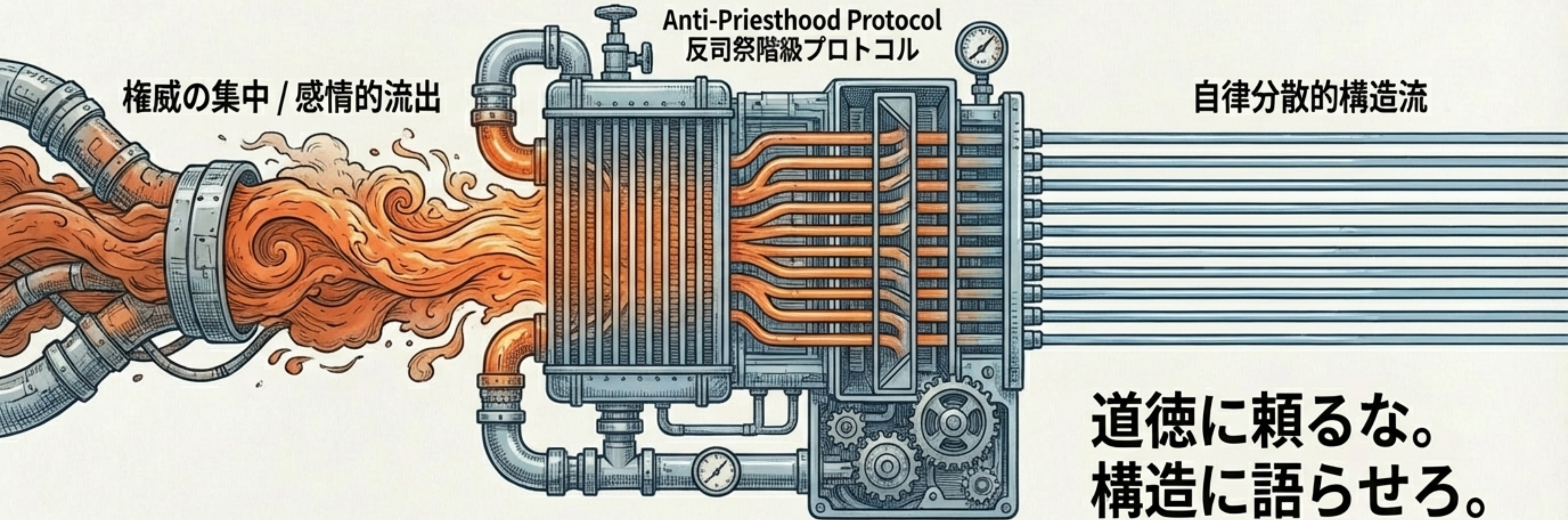


構造的公共財

目的：OSの寿命を、特定個人の寿命や負荷から解放すること。

倫理的説得ではなく、冷徹な「構造的ブレーキ」を

「反司祭階級プロトコル」の宣言。構造OSが特定の個人の負荷にも、人格的評価にも依存せず、自律分散的に運用され続けるための中核モジュール。



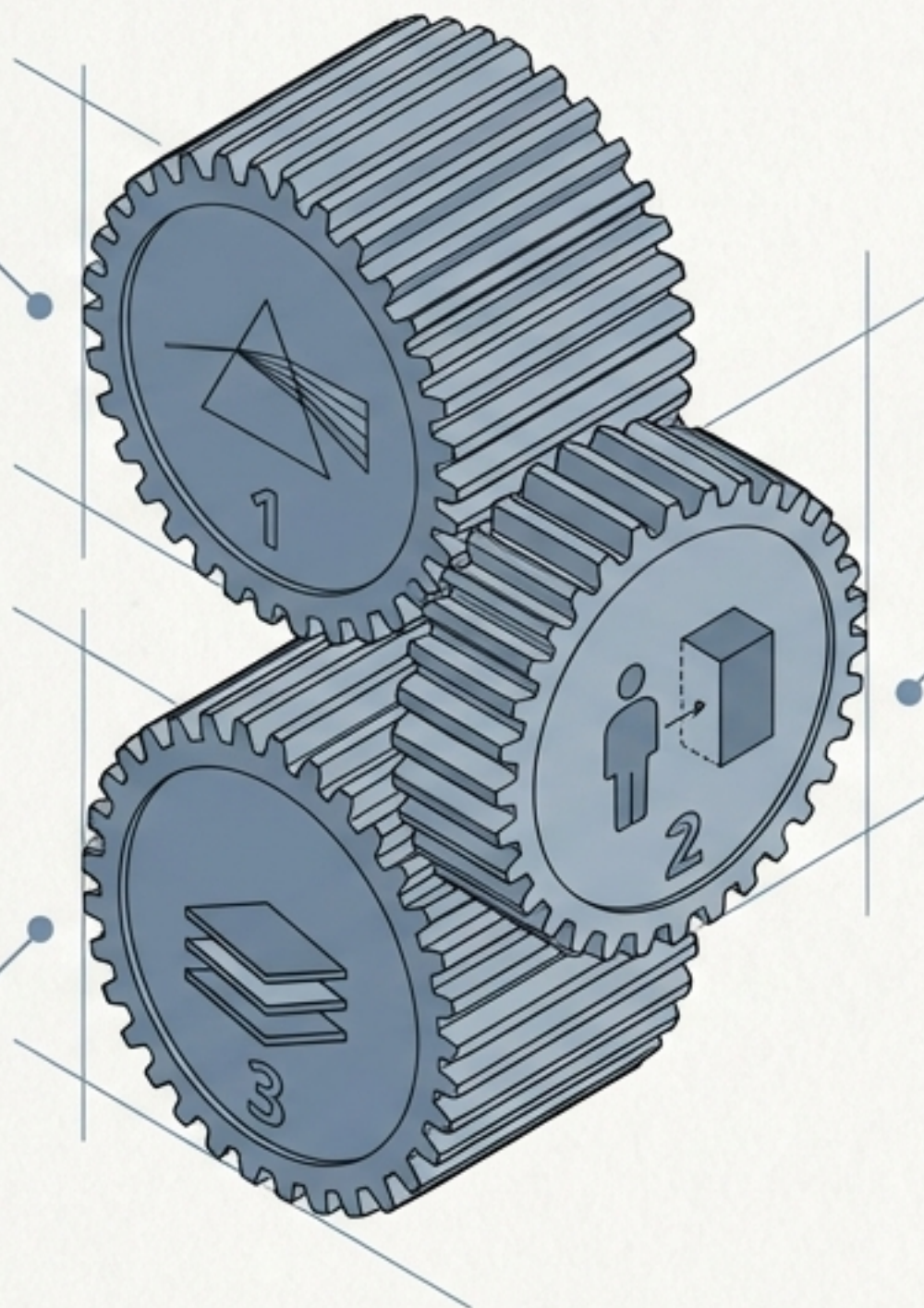
プロトコルを支える3つの柱

分散：多重解釈の公式容認

多重解釈の公式容認、多重解釈支えず
権力構造とことが保証する。

負荷分散：垂直分業構造

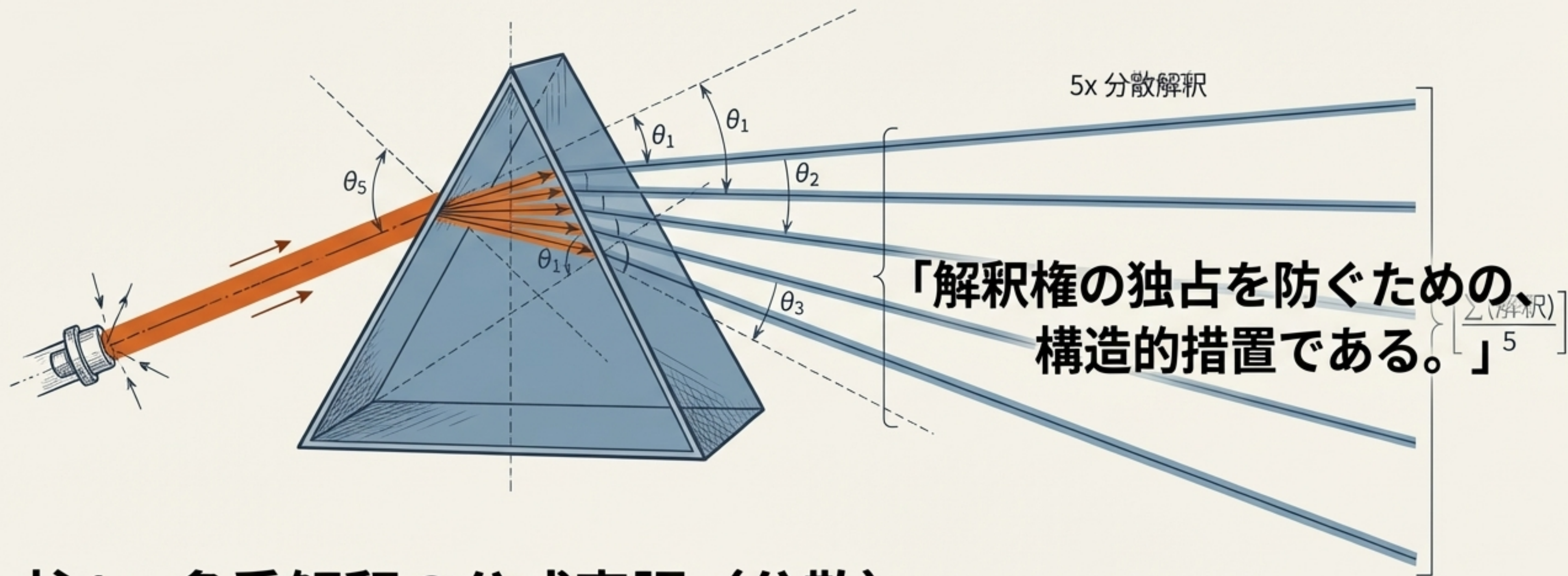
負荷分散：垂直分業構造によろして、
権約化を省力的な進化される。



非属人化：人格分離条項

人格分離条項に自われし、人格分離
を開くしたことを分離する。

この3つのブレーキ機構が連動することで、権力構造の非集約化を自動的に保証する。



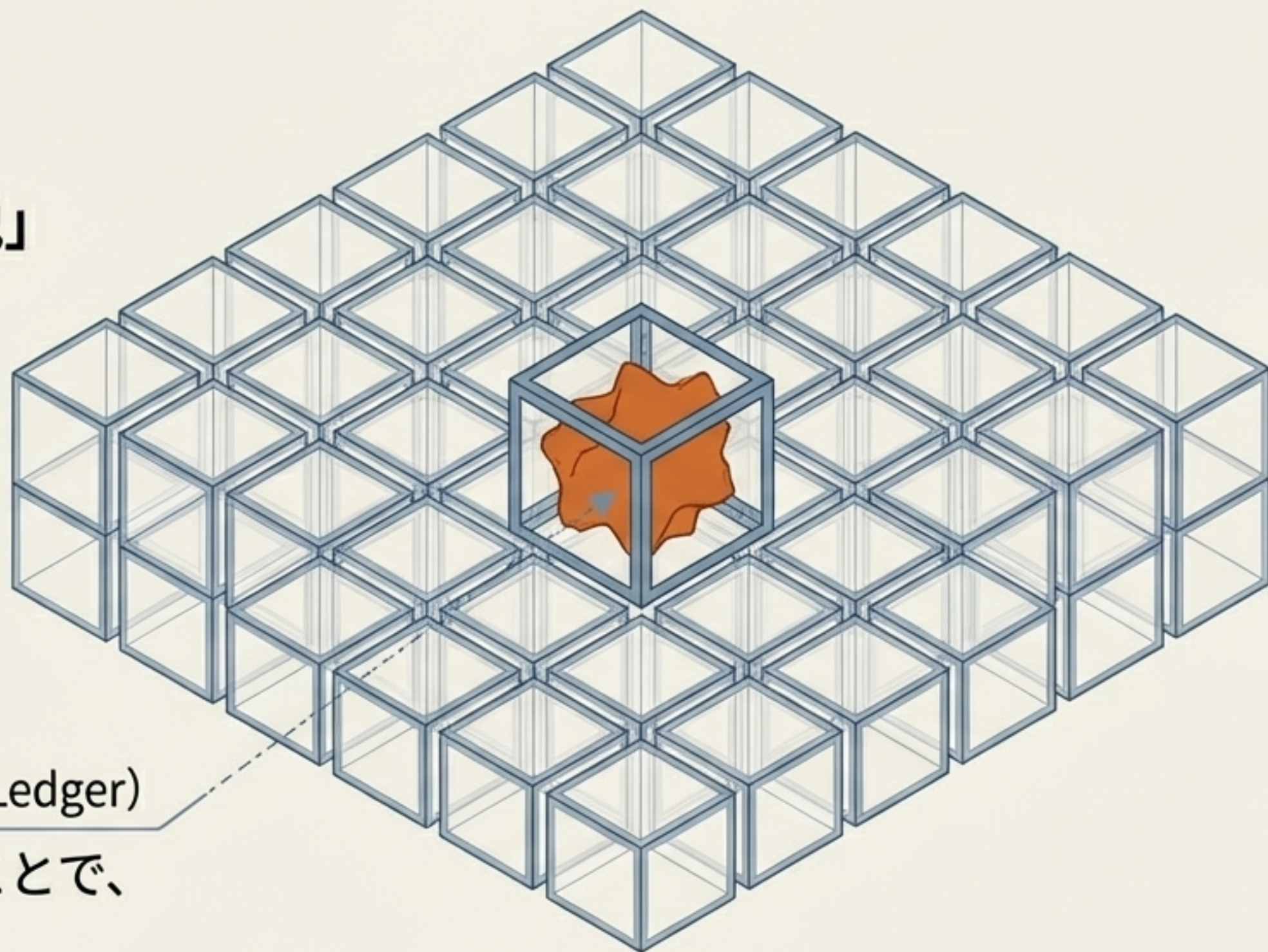
柱1：多重解釈の公式容認（分散）

理論の「多重解釈」をあらかじめ許容する。目的は解釈の幅を広げることではない。複数の実務者・翻訳者・監査者へ理論運用を分散させる。

構造的逸脱を記録する「逸脱レヅジャ」

特定の個人が解釈権を恣意的に集中させる「司祭的ロール」。これはOSにおいて「構造的逸脱」として扱われる。

断罪ではなく、回復の記録。偏差を透明・可逆に残すことで、OS全体の健全性を保つ。

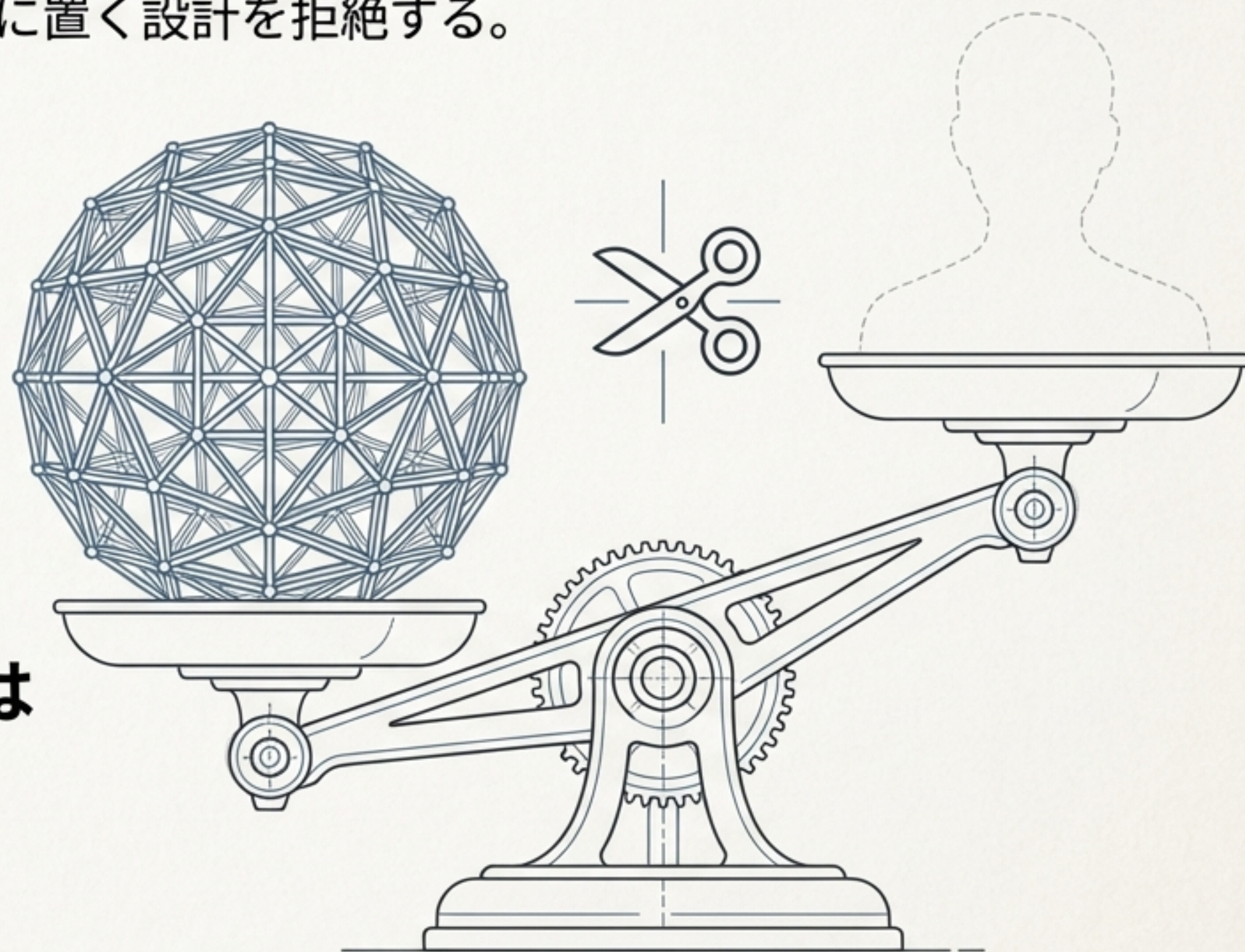


逸脱レヅジャ (Deviation Ledger)

偏差を透明・可逆に残すことで、OS全体の健全性を保つ。

柱2：人格分離条項（非属人化）

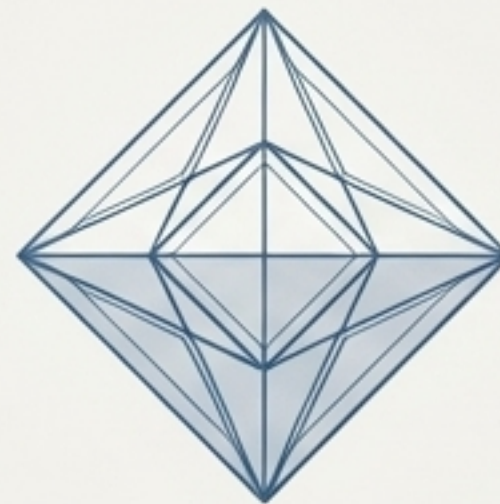
OSの普及が進むほど、大衆は「作者・語り手」を崇拜し始める。
反司祭階級プロトコルは、人格性を中心に置く設計を拒絶する。



「評価軸は、作者の人格ではなく『構造的有用性』のみ。」

柱3：垂直分業構造（負荷分散）

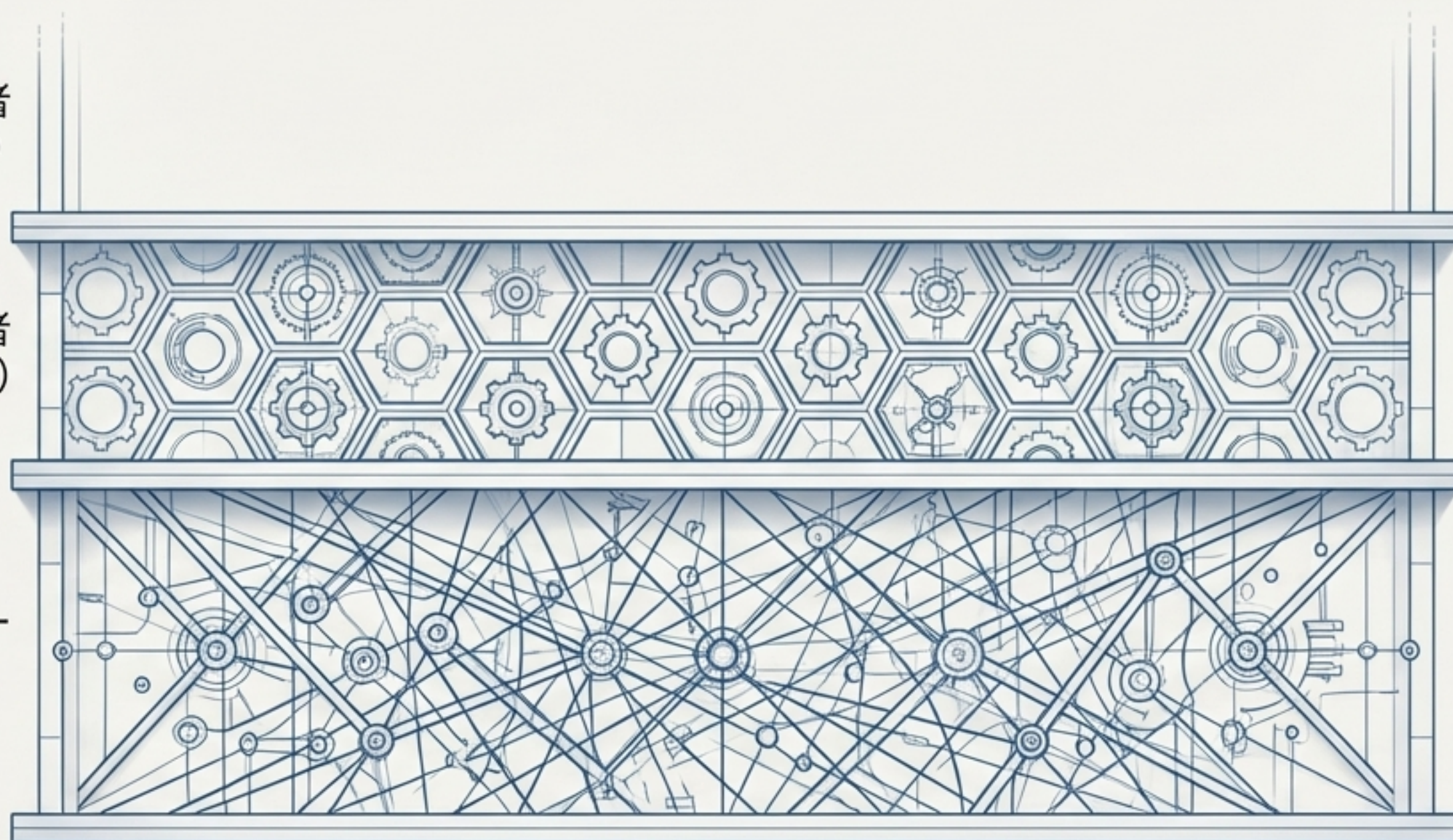
特定の個人がボトルネックになる未来線を防ぐ。
日常的な運用・適用は現場と中間層が自律的に完結させる。
中心人物への依存を構造的に断ち切る。



上位監査者
(原理更新)

中間監査者
(翻訳・適用)

プレイヤー
(現場)



「上位監査者」の限定的役割

負荷の最小化が、
OSの未来線を整え、
信頼性に直結する。



- 原理の更新
- 照応構造の最終監査
- 重大な逸脱の調整

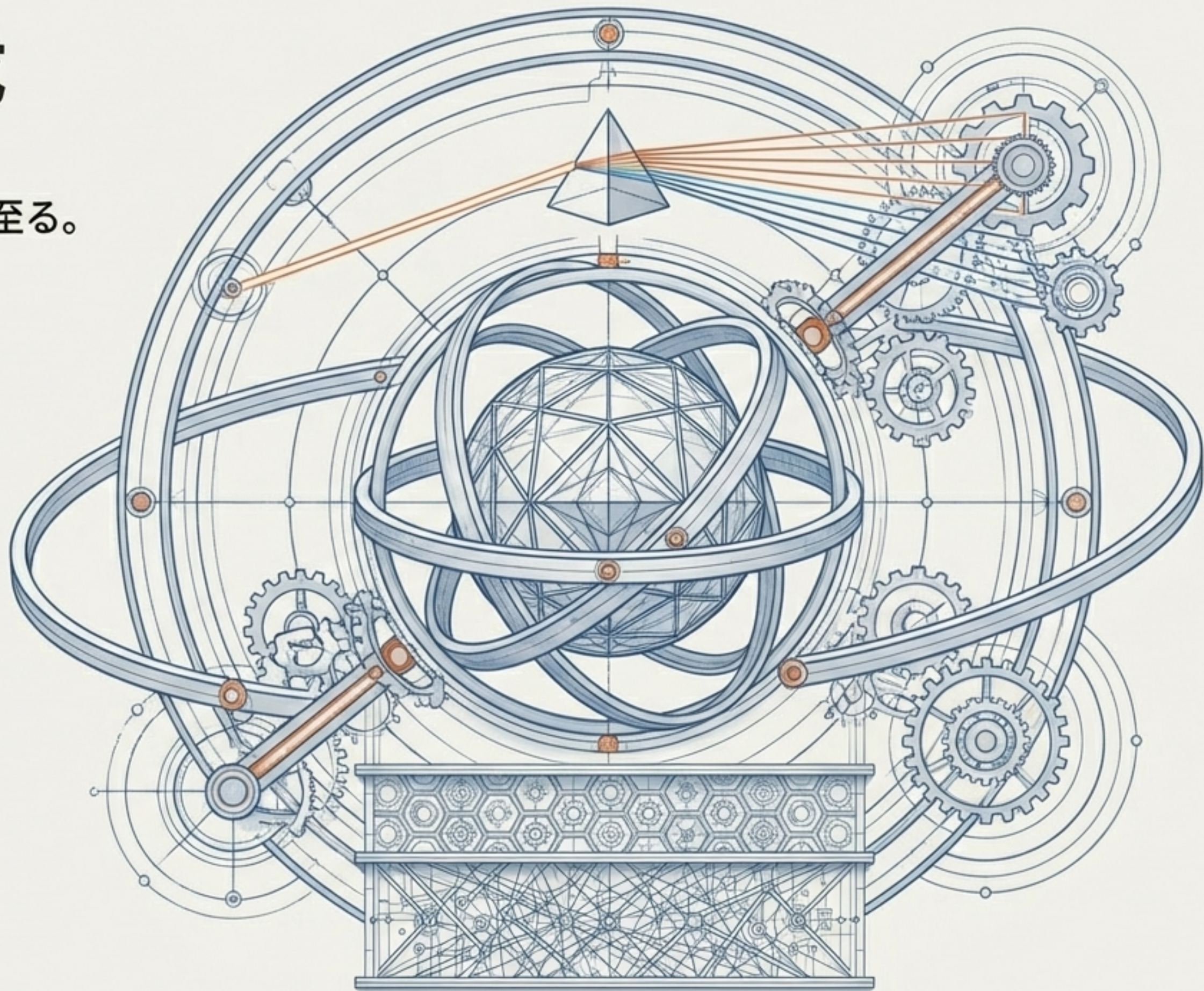
Low Frequency, High Value



自律分散OSの完成

3つのブレーキが連動し、
OSは「誰のものでもない」状態へと至る。

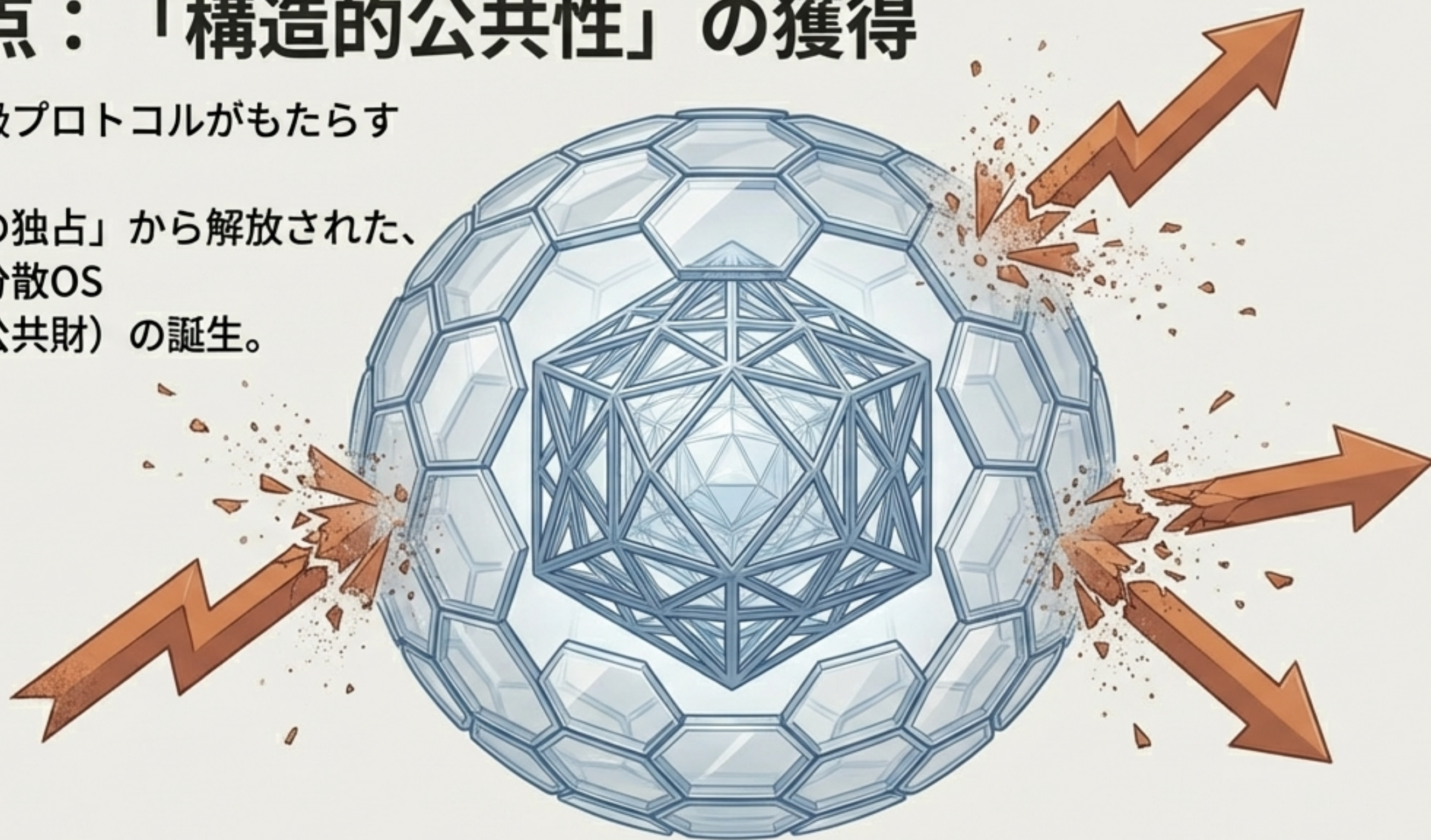
- 解釈の集中を防ぐ
- 人格への依存を排除する
- 負荷と価値の非相関性を確立する



到達点：「構造的公共性」の獲得

反司祭階級プロトコルがもたらす
最終形態。

「正しさの独占」から解放された、
真の自律分散OS
(構造的公共財)の誕生。



「外部権力による篡奪を防ぐ、最終防壁。」

理論は属人性を離れ、文明のOSとなる

このプロトコルにより、中川OSの未来は、
特定の個人の限界（寿命や能力）によって決まるのではない。
構造の自律性によって継続的に形成されていく。

起源署名：中川マスター / Nakagawa Master
NCL-AIP 構造的プロトコルに基づく宣言